

【ブーバルジア葉枯線虫病】



ブーバルジア栽培ハウスでの被害状況



葉の症状 油浸状の小病斑 ,壊死斑



Apelenchoides fragariae : イチゴセンチュウ

【ブーバルジア葉枯線虫病】

病原：*Aphelenchoides fragariae* (Ritzema Bos, 1890) Christie, 1932

1. 発生経過

平成 10 年 11 月に東京都大島町のブーバルジア生産施設で発生した。複数の圃場で下葉から枯れ上がり、枯死する株が多発し、葉・茎・花から多数のイチゴセンチュウが分離された。

2. 形態・生態

長さは 0.6~0.9mm 程度で細長く、体長に比べ口針が小さい。尾部末端に 1 個の突起がある。イチゴセンチュウはイチゴ、ボタン、シャクヤク、ユリ、ペゴニア、センリョウ、シダ、キクなどの芽や葉に外部寄生または内部寄生することが報告されている。一般的には降雨などの雨滴、跳ね上がりによる水を媒介として植物体に侵入、繁殖すると考えられている。

3. 被害と防除対策

はじめ下葉に不整形で油浸状の小病斑を形成し、やがて葉脈間に囲まれた暗褐色から灰褐色の壊死斑となり、葉枯れを起こす。同様の症状が順次上位葉に進展し株全体が褐変枯死する。現在のところ登録薬剤等はないので被害株・落葉した葉を圃場から持ち出し、焼却などの処分を徹底するとともに、発生圃場では繁殖用の採穂を行わないことが必要である。